

俳句は謡うものである(二)

伊藤洋二

【其の二： 俳句と演歌】

今年も押し詰りまして「NHK紅白歌合戦」の師走となりました、ご迷惑を顧みず二回目の愚論を述べさせていただきます。既にご案内の通り「俳句と演歌」の取り合わせですが、さて何からと思案の眠られぬ夜もありました。申し上げるまでもなく俳句は十七音字で森羅万象の機微を表現するものと考えております。難しいですね。演歌は、一般的に作詞家の先生が一番二番三番と丹精込められ、メロディーによりひのき舞台に上がります。

三橋美智也さんの「おんな船頭唄」

嬉しがらせて泣かせて消えた 七 七

春日八郎さんの「赤いランプの終列車」

涙かくして微笑み合うて 七 七

田端義夫さんの「かえり船」

捨てた未練が未練となつて 七 七

口ずさむだけで涙が滲んできませんか。今日も元気で過ごそう、週末は友達とカラオケへ、気分は最高です。一曲約五分前後ですが、何故人様を幸福にするのでしょうか。その導入剤はリズムです。「演歌節」「ワルツ」「ブルース」「ルンバ」「ドドンパ」…。懐かしいですね。音楽は人間に勇気と希望を与えます、カラオケは五分間の魔術師です。

ところが、俳句にはオーケストラもスポットライトもありません。なのに何故、人様を幸福にすることが出来るのでしょうか。私は「季語」だと確信致して居ります。現在、利用させて頂いております歳時記は、平成九年五月初版、角川書店編第三版です。春五五二、夏七二四、秋五〇三、冬五一〇、新年二二五、計二五一四の先人の偉業が燦然と輝いており、その御蔭で時には百字に余る感動を十七音字に凝縮し、あたかもその場に居るが如き世界を具現化しているものと考えます。

私の好きな季語【蟬時雨】。蟬の鳴き声を時雨と重ねる先人の感性は何処から生まれたのでしょうか。古来より「黙して語る」との表現があります。多く語る必要はないのです、むしろ寡黙が、この人あの人毎の幸せを運ぶのです。日本語の持つ魔法のような「言霊」こそ、俳句の極意であり免許皆伝を目指し日夜唸るのです。

さて滑稽俳句に論点を絞って行きます。人様の「笑顔」は何から生れる

か。それは人間の優しさからであり、洒落気からで、それらが滑稽俳句にはあるのです。更に、所謂、実写俳句、難解俳句、デジタル俳句では表現し難い「間で表現する力」が滑稽俳句には残されている、否残さなければ先人のご恩に応えられないのではないかと考えます。とか何とか云々と愚論の風呂敷を広げ過ぎました、そろそろ畳ませて頂きます。本年は何かとお世話になりました。良いお年をお迎え願います。

赤い椿白い椿と落ちにけり 河東碧梧桐

椿が季語ですね。赤い椿と白い椿。さて、あなたはどちらを選びますか。それとも…。

(続く)